

第4章 考察

第1節 千歳6遺跡における竪穴の構造と集落の変遷

瀬川 拓郎

I. はじめに

千歳6遺跡の調査により、我々は、縄文時代中期終末に位置づけられるであろう竪穴住居址の一括資料を得た。本論は、これら竪穴を構成する諸要素について分析と考察を加え、当遺跡における竪穴群の構造を体系的に明らかにするとともに、そこから得られた事実によって、「集落」の動態を示唆する遺跡内の竪穴の変遷と、竪穴群の占地の移動について述べる。ここで扱う資料は、「竪穴」としたもののうち、遺構の性格が不明なB M75, A B12, K L25の3竪穴を除いた全ての竪穴である。

II. 竪穴の構造

1. 竪穴の形態と大きさ

本遺跡で検出した竪穴はいずれも、卵形の均一な平面形をもつものであった。ただし、大形の竪穴の平面形は偏平な長卵形を、小形の竪穴は丸みの強い卵形を呈する傾向が認められた。ここでは、竪穴の大きさについて分析を行ない、大形・中形・小形の区分を明らかにするとともに、竪穴の形態と大きさとの相関性について検討する。

竪穴の大きさ 竪穴は、最大のK E12竪穴で長さ11.1m、最小のZ R40竪穴で長さ2.4mを計る。表1に竪穴各部の計測値を示した。この竪穴の長さについてグラフ化したのが図217である。このグラフから大きく4つの、竪穴の長さのまとまりを抽出できる。すなわち、長さが4mを下回る小形の竪穴、長さが4～6mの間にある中形でもやや小さめの竪穴、長さが6～8mの間にある中形でもやや大きめの竪穴、長さが8mを越える大形の竪穴の以上である（それぞれ順に、L I型、M I—b型、M I—a型、L A型と呼ぶ）。これらの各型の竪穴の分布をみると（図218）、同一型の竪穴が隣接し、その長軸方向もほぼ同じであるという傾向が指摘できる。しかし、このことがそのまま、隣接する同型竪穴間の同時性を意味するかどうかは、現時点ではわからない。小形の竪穴であるL I型は、M I・L A型の分布域を離れて散在する傾向が認められる。これらL I型竪穴の居住面積は、最小のZ R40竪穴を例にあげれば、炉と竪穴先端部の浅い掘り込みの面積を引いた竪穴面積は、わずか3.8㎡に過ぎない。これは、

竖穴名	SR25	XL25	RG05	TL12	CB75	MT05	XR80	WI65	MB05
長さ: x	7.1	7.9	6.9	6.4	7.7	6.8	7.3	5.7	5.3
幅1: y	4.2	4.2	4.0	3.7	5.0	4.0	4.6	3.4	3.5
幅2: z	4.8	5.3	4.8	4.6	5.7	4.5	5.2	4.2	4.3
$\frac{3}{2}y/x$	1.8	1.6	1.6	1.8	2.0	1.8	1.9	1.8	1.9
$\frac{3}{2}z/x$	2.0	2.0	1.9	2.1	2.2	1.9	2.1	2.3	2.4
KE12	RZ25	SP38	NO31	DC12	ZR40	ER34	EL12	FU69	XJ40
11.1	8.8	8.9	3.5	3.0	2.4	3.1	3.6	3.3	5.5
5.4	5.2	4.8	2.4	1.9	1.8	2.1	2.4	2.6	2.6
7.0	6.2	5.7	2.9	2.4	2.0	2.5	2.9	3.3	4.0
1.5	1.8	1.6	2.0	1.9	2.1	2.2	2.0	2.4	1.9
1.9	2.1	1.9	2.4	2.4	2.4	2.6	2.4	3.1	2.4

表5 竖穴の長さ・幅・構成比 長さは、竖穴先端から基部までの長さ。幅は長さを3等分した点で計った2つの幅のうち、基部寄りの幅をz、先端部寄りの幅をyとする。いずれも単位はメートル。 $\frac{3}{2}y/x$ および $\frac{3}{2}z/x$ は、それぞれ長さに対する幅の関係を示すもので、 $\frac{3}{2}y/x$ は先端部寄りでの幅yを長さの3等分の数値 $\frac{x}{3}$ で割ったもの、 $\frac{3}{2}z/x$ は基部寄りでの幅zを同じく $\frac{x}{3}$ で割ったものである。この2つの数値は、後で述べる竖穴の形態分析に関係する。なお、MB05竖穴の各数値は、テラス状の張り出し部を除いた場合の計測値である。

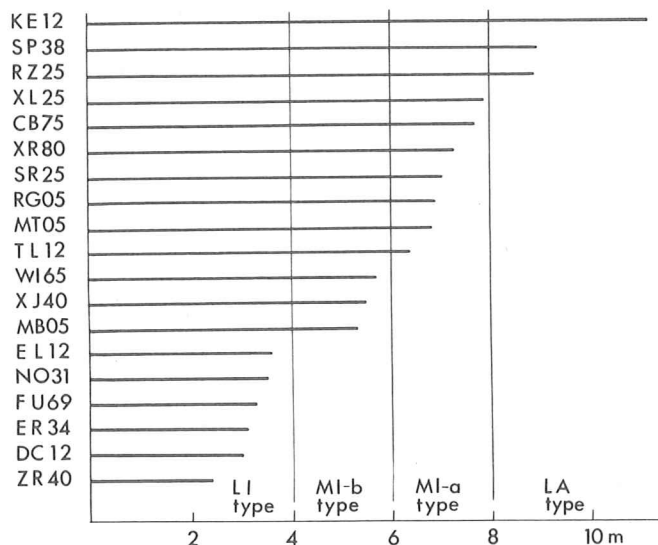


図217 竖穴の長さとそのグルーピング 横軸は竖穴の長さ(単位メートル)を示す。そのまともりから、小形の竖穴(LI型)、中形でもやや小ぶりの竖穴(MI-b型)、中形でもやや大ぶりの竖穴(MI-a型)、大形の竖穴(LA型)の4つのグループが設定できる。LI型: NO31, ZR40, DC12, FU69, ER34, EL12, MI-b型: WI65, MB05, XJ40, MI-a型: XL25, RG05, TL12, CB75, MT05, XR80, SR25, LA型: SP38, RZ25, KE12

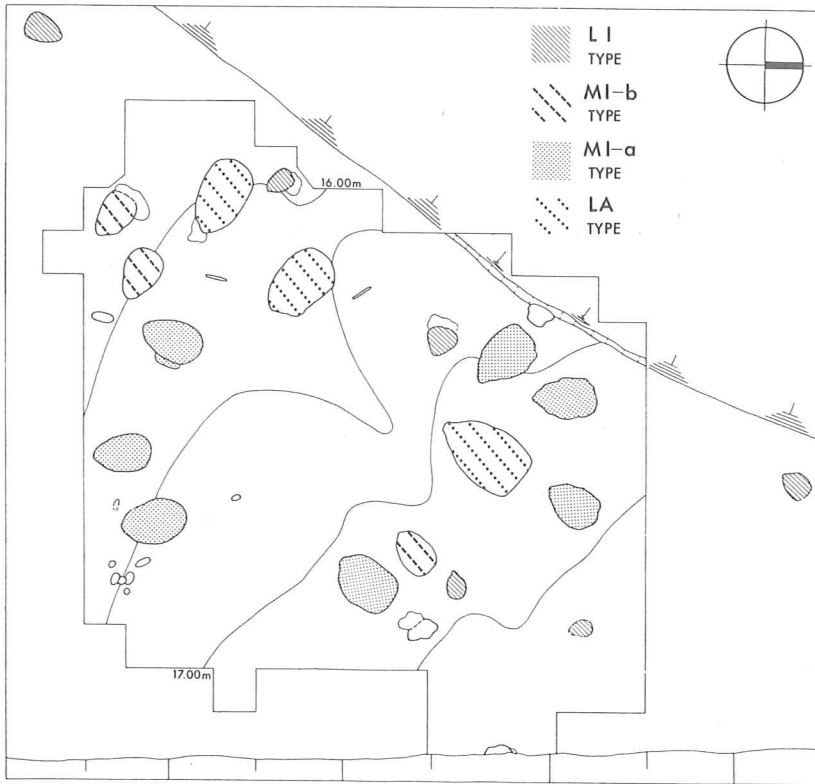


図218 大きさのグルーピングによる各型式別堅穴分布 図217をもとに、各型式別の堅穴の分布を示した。同一型の堅穴が隣接し、長軸方向を一にする傾向が認められる。

関野が想定した1人当りの起臥面積である 3 m^2 を若干上回る程度の数値である。このことから、LI型堅穴は、全てをそうだとするわけではないが、単数の人間による居住の可能性の強い例を含むことは確かである。そして、このような単数、あるいは複数としてもおそらくせいぜい2～3人によって居住されたであろう堅穴が、集落のいわば“はずれ”に分布することは、その居住者の性格を考えるうえで興味深い事実であるに違いない。²⁾

堅穴の形態と大きさとの相関性 堅穴の形態の異同をグラフ化したものが図219である。y軸数値およびx軸数値の大きいものほど丸みの強い卵形で、逆のものほど偏平な長卵形であることを示す。この表から、まず丸みの強い堅穴の一群(LI型、MI-b型)と、偏平な長卵形の一群(MI-a型、LA型)に大きく二分することができる。そして、それぞれの群が、より丸みの強い一群(LI型)と丸みの強い一群(

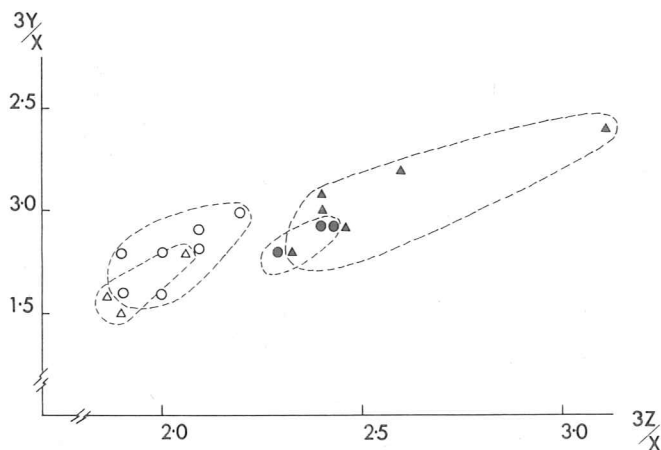


図219 堅穴形態の異同 表1に示した $3z/x$, $3y/x$ 数値を用い、堅穴形態の異同をグラフ化した。 Δ はLA型の堅穴、 $\circ$ はMI-a型の堅穴、 $\bullet$ はMI-b型の堅穴、 $\blacktriangle$ はLI型の堅穴をそれぞれ表わしている。おおそ、y軸数値およびx軸数値の大きいものは丸みの強い卵形、逆のものは偏平な長卵形のプランをもつ。この図から、長さの分類によって設定した堅穴各型に対応して、そのプランも微妙に異なることがわかる。

MI-b型), より偏平な長卵形の一群(LA型)と長卵形の一群(MI-a型)におおそ二分されることも読みとれる。このことから、大形の堅穴であるほど偏平な長卵形に近づき、小形の堅穴であるほど丸みの強い卵形に近づくことがわかる。FU69堅穴は、かけ離れた数値を示しているが、これはこの堅穴の平面形が他の堅穴と異なり、隅丸の三角形を呈するためである。FU69堅穴は、本遺跡中唯一の土器囲い炉をもち、覆土中にIII 2 b・III 2 c群を多く含むことなど、注意すべき点が多い。

図220は、表1の堅穴構成比数値($3y/x \cdot 3z/x$)を平均し、その数値から作製した平均的な堅穴形態のモデルである。整った卵形をなすことがわかる。このモデルによって各堅穴についてみていくと、いくつか印象の異なる形態の堅穴を抽出することができる。KE12, RG05, XL25, CB75の各堅穴がそれで、基部が直線状をなし、側縁移行部が弱く角をもつ。これらの堅穴は、不整な環状をなす堅穴群の北半に限定的に分布する(図221)。

2. 上屋構造の復元

最初に支柱穴の配列を分析し、それを踏まえたうえで、焼失堅穴の炭化材出土状況から上屋構造について考察を行なう。

支柱穴の配列 ほとんどの堅穴では、壁から0.5～1 m内側の線上に柱穴状の掘り肩

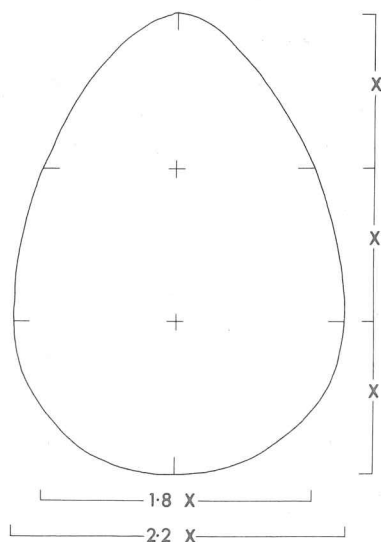


図220 平均的な縦穴形態のモデル 表1の縦穴構成比数値($\frac{3y}{x} \cdot \frac{3z}{x}$)を平均し、その数値から作製した縦穴形態のモデルを示した。整った卵形をなすことがわかる。

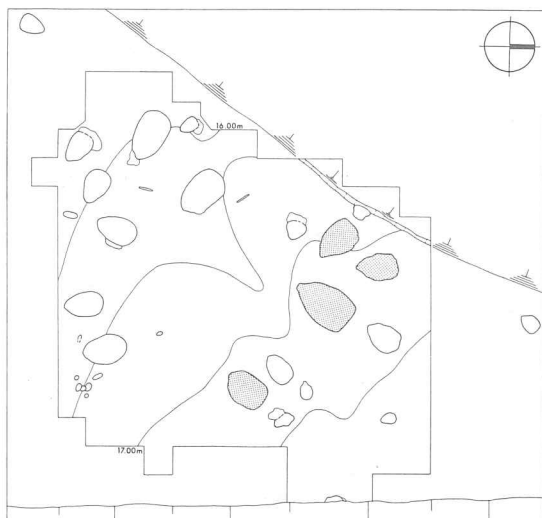


図221 縦穴基部が直線状をなす縦穴の分布 基部が直線状をなし、側縁移行部が弱く角をもつ縦穴の分布を示した。不整な環状を呈する縦穴群の北半に限定的に分布していることがわかる。

が巡っていた。このうち、他の掘り肩に較べて一段と深く、左右対称に對になるものを主柱穴と判断した。図222に、推定される主柱穴の分布を示した。主柱穴は8個あるいは10個で、長軸で分割した場合左右対称になるように2個1対で配列されている。主柱穴が6個と推定されるW I 65堅穴、12個と推定されるK E 12堅穴は、いずれも例外的である。L I型として分類した堅穴には主柱穴と思われる掘り肩が認められない。この点でも、L I型の堅穴は他の堅穴と区別されるであろう。

上屋構造の復元 焼失堅穴と判断したのは、S R 25、W I 65、Z R 40、E L 12の4堅穴であった。このうち、炭化材の遺存がよいS R 25、W I 65の2基の堅穴をあけて、上屋構造について述べる。まず、両者に共通する出土状況を抽出してみよう。

1. 壁に沿って並ぶ材と、これに直交して重なる材の組合わせが認められる。S R 25堅穴では、壁に沿って並ぶ材は径7～8cm、これに直交する材は径3～4cmと、太さがそれぞれに揃っていた。この組合わせは、いずれの堅穴でも、壁から堅穴中央に向かって下傾して出土した。直交する材は、堅穴中央に向かって求心状を呈する。

2. 堅穴中央部では炭化材の分布がやや稀薄だが、壁際の炭化材に較べて太めの材が出土する。S R 25堅穴では、堅穴中央部で出土した材はいずれも径10cm前後であった。堅穴中央部付近の材は、ほとんどが床面に密着して出土した。3. 茅材は、壁際の床面および炭化材にまじって床面のやや上方から出土した。また、両堅穴で、壁に貼り付いて立ち並ぶ茅材を検出した。4. 焼土と炭化材の分布が重なるところでは、炭化材の上に焼土が被っていた。

1での材の組合わせについて検討してみよう。まず、これが上屋構造であるのか、あるいは壁の土留め施設であるのかが問題となる。出土状況を見ると、壁に密着していた例がなく、壁から堅穴内に傾斜する炭片を含む三角堆積をはさんで出土していることから、壁に密着していたものがそのままの構造を保って倒れたものとは考えられない。であるならば、上屋施設がその構造を保ったまま崩落としたとすべきであろう。材の在り方から、この上屋は、径3～4cmの材を垂木として求心状に配し、これに径7～8cmの材を横木としてかませた構造のものと考えられる。2の、堅穴中央部に分布する材は、その径の大きさと分布位置から、棟木や主柱が倒れ、崩落したものと考えられる。3の茅材は、壁に貼り付いて立ち並んでいたものについては土留めの可能性が高い。炭化材にまじって床面上方から出土したもの、壁際の床面に密着して分布していたものについては、それぞれ上屋の葺き上げ、床面に敷いたものとする。4の焼土と炭化材の被覆の関係はどう理解すべきであろうか。まず、焼土が生じる原因について考えてみよう。焼土は、W I 65、S R 25いずれの堅穴においても、ロームが焼けて赤化したものであった。このことと、焼土が炭化材の上に被るように出土する事実から、焼土が生じる原因・状況には、以下の3つの場合が想定できる。

1. 壁周堤として積み上げたロームが崩れ、あるいは崩されて炭化材を覆った。³⁾ 2. 上屋崩落後、ロームを投げ込んだ。3. 上屋上をロームが覆っており、上屋とともに崩落した。

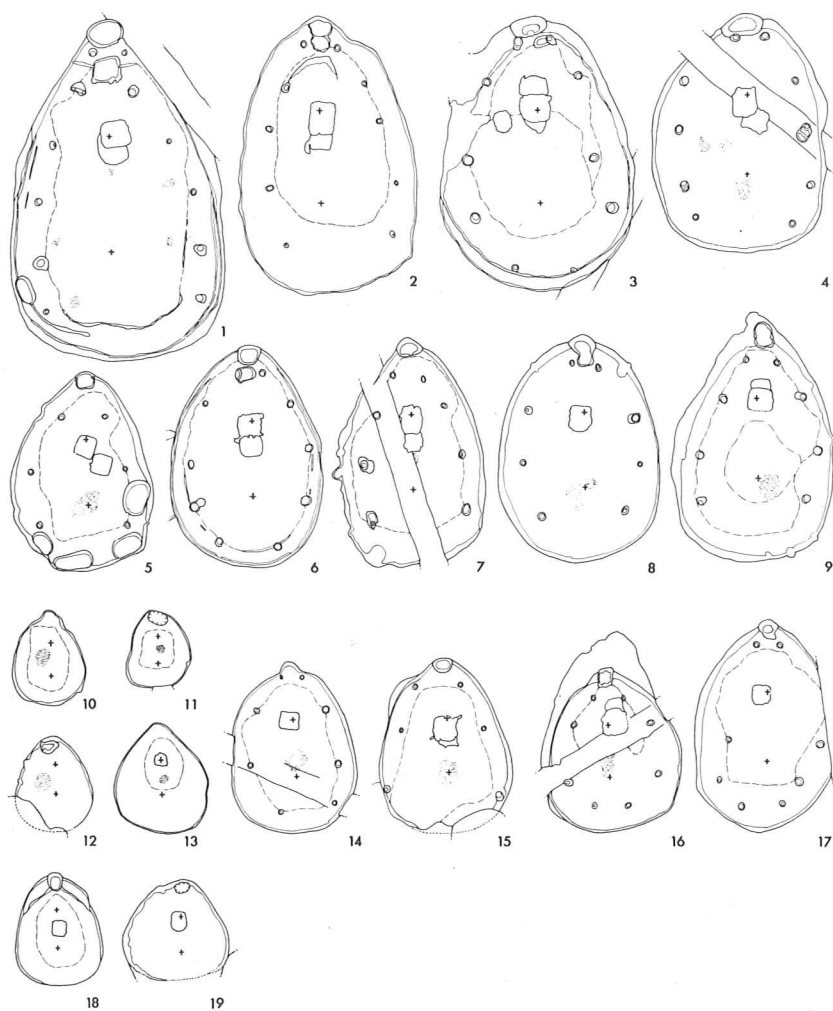


図222 各竪穴における主柱穴の分布 各竪穴における推定される主柱穴の分布を示した。十字マークは、竪穴長軸の3等分点を示しており、これと最終的な石囲炉の位置とが対応することがわかる。1: KE12, 2: SP38, 3: RZ25, 4: CB75, 5: TL12, 6: SR25, 7: RG05, 8: XR80, 9: XL25, 10: DC12, 11: ZR40, 12: ER34, 13: NO31, 14: XJ40, 15: WI65, 16: MB05, 17: MT05, 18: EL12, 19: FU69

1については、焼土が堅穴中央を含めたそのほぼ全面に分布していることから考えにくい。2については、SR25堅穴先端部で検出した焼土のように、 1.4×1 mの範囲に厚さ20cmで堆積する分量のロームを一度に投げ込んだとは思われない。出土状況からして、3の場合が最も考え易いであろう。このとき、TL12堅穴で検出したまじりのない大量のロームの堆積（第2章図33参照）も、上屋を覆っていたロームが一時に崩落したと考えるのが最も妥当であるかもしれない⁴⁾。以上から、焼土と炭化材の被覆の関係は、上屋に被せた掘り上げ土のロームが、火災時の火熱によって焼土化し、上屋とともに崩落した状況を示すものと理解したい。

以上の分析から、上屋構造についてまとめを行なう。堅穴を掘り込んだのち、まず、その長軸で分割した場合左右対称になるように、左右1対で1組みの柱を、4組あるいは5組ほぼ等間隔に立てる。このとき、いくつかの堅穴で検出した主柱穴間を埋めるように分布していた小形の柱穴は、間仕切り⁵⁾の柱を立てたものかもしれない。柱の上には、桁や棟木を渡し、屋根組みを行なう。これに径3～4 cmの垂木を平行あるいは扇状に配し、径7～8 cmの材を横木としてかませる。この骨組を茅で葺き上げたのち、掘り上げたロームを、その粘質性を生かして上屋上に被せていく。堅穴内では、壁に茅材を貼り付けて土留めとする。茅材の押さえがどのように行なわれたかは不明である。壁際の床面にも茅が敷かれたであろう。

3. 堅穴内の区画

ほとんどの堅穴の床面は、固い床とやわらかい床に明瞭に二分でき、固い床を中心としてその外側にやわらかい床が広がっていた。この床面の固さにおける二重性を中心に、堅穴内の区画について考察を行なう。

固く踏みしまり、時に表面がウロコ状を呈する床面は、LI型の堅穴の一部を除く全ての堅穴に認められた。この固い床面の広がり⁶⁾は、ほとんどの堅穴では、主柱穴を結ぶ線の内側に対応していた。この外側には、内側の床に較べてしまりのないやわらかい床が広がっており、堅穴基部付近での幅は、平均して60～80cmを計る。LI型のZR40堅穴では幅40cm前後であるが、この数値は、MI型のSR25、WI65堅穴と同じで、小型の堅穴におけるやわらかい床の幅が極端にせまいということはない。むしろ、MI型と較べて大きな差は認められない。KE12堅穴のように大形の堅穴では、幅は80～120cmと若干広い。堅穴基部にベンチをもつ堅穴の場合、固い床の分布は、KE12堅穴ではベンチ下端まで広がっており、RZ25堅穴ではベンチ下端から60～120cm内側に広がっていた。WI65、MB05、SP38の3堅穴では、固い床は炉を中心とした範囲に広がっていた。

床面が固く踏みしめられているという事実は、当然のこととして、その空間の頻繁な利用を物語るものであろう。ただし、頻繁に、あるいは日常的に利用することに変わりはないとしても、人が立って歩き回る空間と、起臥に利用する空間とでは、その

床の固さに違いが生ずるであろう。それゆえ問題となるのは、固く踏みしまった床は、人が立って歩き回り日常的に利用した結果生じたものであるとしても、その外に広がるやわらかい床面の空間が、日常的に利用されることがなかったのか、あるいは利用するにしても固い床面の空間と利用の仕方が違っていたのか、という点であるに違いない。

W I 65およびS R 25堅穴で、茅材が壁際を中心に敷かれていたと考えられることは、既に述べたところである。このような茅材が敷かれていた空間は、おそらく起臥の空間として考えるのが妥当なように思われる。すなわち、やわらかい床面の空間は、起臥の空間として日常的に利用されていたものと考えたい。その場合、固い床面の空間は、土間として居住者共用の作業空間にあてられていたものと想定する。だが、このとき、K E 12およびT L 12堅穴で検出した小堅穴の存在が問題となるであろう。この小堅穴は、いずれも長さ100cm、幅60cm、深さ40cm前後の隅丸方形を呈するもので、堅穴の壁際に掘り込まれている。T L 12堅穴の例については、底面に黒色土が薄く堆積し、その後堅穴とともに一気に埋没していることから、堅穴と併行して存在し、なおかつしばらく開口状態にあったものと考えられる。K E 12堅穴の小堅穴についても、形態・規模・位置がT L 12堅穴のものと類似するため、同様の性格をもつと考える。T L 12堅穴では、堅穴基部の壁に沿って4基の小堅穴が分布しており、これが全て開口していたとすれば、そこに起臥の空間を想定するのは困難である。しかし、この小堅穴に、その形状・大きさ・位置からみて仮に貯蔵穴としての用途を想定するなら、壙口部には蓋がされるであろうから、起臥にさしたる支障はなかったに違いない。貯蔵穴でないとしても、これらの小堅穴が口を開けたままで居住が行なわれたとは考えにくい。

床面から完形の遺物（土器・石器）を出土したS P 38, M T 05, E L 12堅穴では、E L 12堅穴先端部寄りの床面から出土した一部の遺物をのぞいて、いずれも堅穴基部の壁際に遺物が位置していた。これは、壁際の空間が道具をおく場としても利用されたことを物語るのかもしれない。R Z 25, K E 12堅穴の基部、E L 12堅穴の先端部に巡っていたベンチ状の構造は、以上の推定から、起臥の場合あるいは道具をおく場として利用されたことも考えられる。

4. 「先端部ピット」

堅穴の先端部には、長さ・幅50cm、深さ5cm前後の隅丸方形あるいは不整な円形を呈する浅い皿状の掘り肩が、ほとんどの例に認められた。N O 31, X J 40, D C 12堅穴ではこれを検出できなかったが、後者2つの堅穴に関しては、凸状にとびだした先端部の状況から、この掘り肩に類するものがあったと推定される。M B 05堅穴では、この掘り肩の底面周縁に深さ10cm前後の掘り込みが巡っていたが、他にこのような施設をもつ例は認められない。S R 25, M T 05, X L 25堅穴では、この掘り肩の底面が

固く踏みしまっているのが観察された。入口部としての性格を示すものであろうか。また、X J 40 竪穴では、その関係は明らかでないが、先端部ピット覆土中に立石状のものが見られた。祭壇としての利用を示すものかもしれない。⁶⁾ 本遺跡の竪穴とほぼ同時期に位置づけられる函館市西桔梗 E2 遺跡の竪穴の先端部ピットについて、加藤は、「柱穴としての用をなしていたものではなく、この内部に石及び土器の存在することから、貯蔵穴である」と想定している。しかし、貯蔵穴として認定するには、その論拠にも、あるいは浅い皿状を呈するピットの形態からいっても、多分に無理があるように思われる。本遺跡の竪穴では、この先端部ピットが貯蔵穴であるという積極的な証左は認められない。いずれにしろこの先端部の掘り肩が、本遺跡の竪穴に共通する施設であることはまちがいない。そこで、この掘り肩に「先端部ピット」の名称を与え、他の掘り肩と区別したいと考える。

5. 炉の構造とその改築の意味

炉の構造 L I 型をのぞいた各型の竪穴にはいずれも、石囲炉あるいは石囲炉と推定される炉が伴う。L I 型では、N O 31, E L 12 両竪穴が石囲炉をもつものの、F U 69 竪穴では土器囲い炉、その他では地床炉と一定しない。石囲炉は、方形あるいは長方形に浅い掘り込みを行ない、その周縁をさらに掘りくぼめて円礫を配するもので、平均して 1 辺 60~80cm を計る。L I 型の竪穴である E L 12, N O 31 竪穴の石囲炉は、1 辺 40~50cm, L A 型の K E 12, S P 38 竪穴では 1 辺 90~100cm で、竪穴の大きさに略々比例して炉の大きさも変化することがわかる。石囲いは、円礫の長軸を連ねて形成している。⁸⁾ 包含層中の石囲炉である F 004 は、円礫の短軸を連ねて石囲いを形成しており、その円形を呈する石囲いの形状からも、竪穴の石囲炉と区別される。S R 25 竪穴の第 1 炉, W I 65 竪穴の第 1・2 炉のように、炉の隅に礫を放射状（ウイング状）に配するものも認められた。大半の竪穴で、石囲炉の改築が行なわれているのも特徴的である。なお、Z R 40, E R 34, D C 12, S P 38, F U 69, S R 25, R Z 25 の各竪穴をのぞく全ての竪穴には、石囲炉後方に地床炉が存在した。

炉の位置 石囲炉（複数の石囲炉が検出されている場合には、その最も新しい石囲炉）は、いずれも竪穴長軸上の先端部寄りに位置し、これに大きくずれることはない。図 222 に、竪穴長軸の 3 等分点と炉位置の関係を示したが、これによっても、炉がかなり規則的に配置されていること、そして、長軸の 3 等分点が炉位置と対応することがわかる。地床炉の位置については、石囲炉ほど規則的ではないが、石囲炉より先端部寄りには位置しないこと、長軸の 3 等分点の基部寄りの点付近に位置する例が多いことを指摘できる。最終的に構築されたと推定される石囲炉の側辺は、竪穴長軸と平行あるいは直交しており、長軸に対して大きく斜めにずれて配置されている例はない（R Z 25 竪穴の第 4 炉は、竪穴長軸に大きくずれるが、これが最終的な炉であるかどうかはわからない）。以上から、石囲炉に関しては、竪穴長軸の先端寄りの 3 等分点

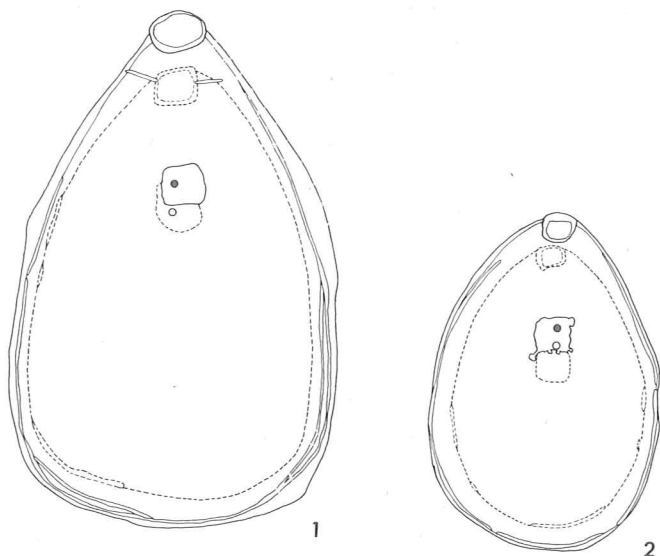


図223 竪穴の改築と石囲炉の改築の関係 KE12竪穴(1), SR25竪穴(2)それぞれにおける竪穴改築と石囲炉改築の状況を示した。実線によって最終的な竪穴の平面形およびその附帯施設(石囲炉, 先端部ビット, 周溝)を表わし, 破線によって周溝の在り方から推定される改築以前の竪穴の平面形と, 検出・確認されたその附帯施設を表わす。また, 図中の●は最終的な竪穴の, ○は改築前の竪穴の長さの3等分点(先端部寄りの点)を示す。この図から, 改築された炉の位置が, 竪穴の改築に伴うその長さの3等分点の移動にはほぼ対応していることがわかる。

付近に位置し, 長軸方向に沿って設けられているという規則性を確認しておきたい。

改築の意味 以上述べた石囲炉の位置の規則性からすれば, CB75, TL12両竪穴における長軸から大きくずれ, これに斜交して位置する最終的な石囲炉以前の“旧炉”の在り方は, どのように説明されるであろうか。石囲炉の改築は, SR25, KE12竪穴で周溝が重複して巡っていた事実から, 竪穴の改築(建て替え・建て増し)に伴うものである可能性が高い。問題は, 竪穴の改築によって, 石囲炉の軸が竪穴の長軸と大きくずれることである。まず, 周溝の存在によって改築以前の竪穴の形態が推定できるSR25, KE12竪穴を例にあげ, 竪穴の改築と石囲炉の改築の関係を検討してみよう(図223参照)。

SR25竪穴では, 壁際と, 竪穴基部を中心に壁から40~50cm内側に二重に周溝が巡っている。P2は, 上面に貼り床が行なわれていた浅い掘り肩であるが, これはその形状・深さから, 後述する「先端部ビット」である可能性が高く, 旧竪穴のそれが改築に伴って埋め戻しと貼り床が行なわれたものと考ええる。これを先端部ビットとし, 内側に巡る周溝の在り方とあわせ考えると, 改築前の竪穴は, 最終的な竪穴をそのま

ま全体に縮めた形状の長さ5.9m、幅4.8mの堅穴と推定される。図中、黒丸は最終的な堅穴の、白丸は改築前の堅穴のそれぞれ長さの3等分点（先端部寄りの点）を表わしている。この図から、改築された炉の位置が、堅穴の改築に伴うその長さの3等分点の移動にほぼ対応することがわかる。KE12堅穴では、周溝が二重、部分的に三重に巡っており、様相が複雑だが、それぞれの部分で最も内側を巡る周溝が、最も古い堅穴の形状を示すものと仮定しよう。P10は、上面に貼り床が行なわれていた浅い掘り肩で、SR25堅穴のP6と同様、改築前の堅穴の先端部ピットと考えられる。周溝とこの先端部ピットの在り方から、改築前の堅穴は、最終的な堅穴をそのまま全体に縮めた形状の長さ9.0m、幅6.0mの堅穴と推定される。ここでもSR25堅穴と同様、堅穴の改築による長さの3等分点（先端部寄りの一方の点）の移動に伴って、石囲炉の位置が移っている。

以上の分析から、堅穴の改築が元の堅穴の形状を生かし、その長軸を同じくして行なわれる場合、石囲炉の改築は堅穴長軸に沿って行なわれ、堅穴の長さの3等分点（先端部寄りの一方の点）にその位置が対応することがわかった。とするならば、CB75、TL12両堅穴での改築前後の石囲炉の堅穴長軸とのずれは、堅穴の改築が元の堅穴と長軸方向をずらして行なわれたことを示すものであろう。図224に、推定される堅

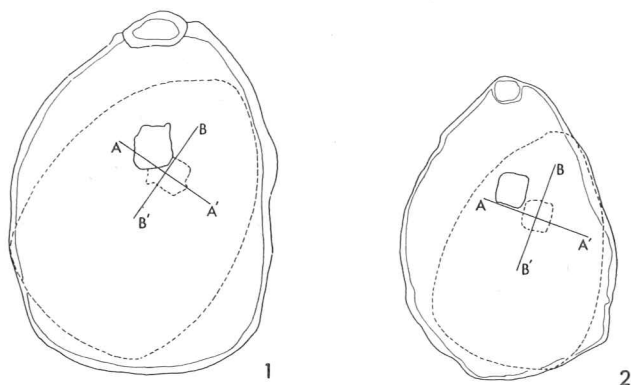


図224 石囲炉の改築状況から推定される建て替え以前の堅穴 CB75堅穴(1)、TL12堅穴(2)それぞれの推定される改築前の堅穴を破線で示した。推定の理由は次の通りである。両堅穴とも、その改築前の堅穴は、旧炉の大きさから考えてL I型であった可能性はうすい。即ち、L I型より大きめ（長さ4 m以上）の堅穴であったと考えられる。また、当遺跡の堅穴はEL12堅穴を除いて全て先端部が南東—南西に向いており、改築前の堅穴の先端部方向がこれに大きくずれるとは考えにくい。とすれば、改築前の堅穴の長軸方向はA—A'あるいはB—B'で、その先端部はAあるいはBの延長線上にあったはずである。しかし、TL12、CB75両堅穴とも、長軸をA—A'とした場合、堅穴長4 m以上で先端部をAの延長線上にもち、炉が堅穴長の3等分点に納まる改築前の堅穴を想定するのは困難である。それゆえ、改築前の堅穴は、長軸をB—B'に、先端部をBの延長線上にもち、堅穴の長さが4 m以上の、およそ破線で示したプランをもつものと推定される。

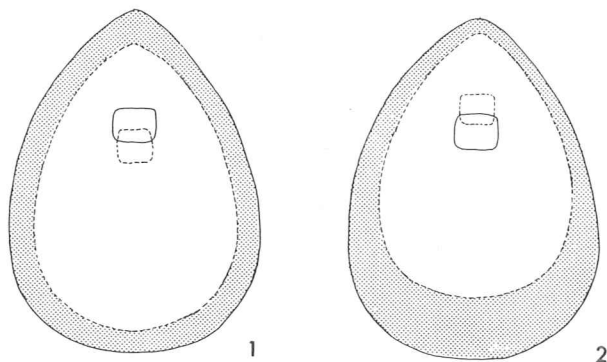


図225 石囲炉の改築方法2種とそこから推定される竪穴改築の2つのタイプ
1・2は、CB75・TL12竪穴以外の竪穴における石囲炉の改築方法と、そこから推定される竪穴改築の仕方を、2つのモデルに収約したものである。石囲炉の改築方法には、新炉を旧炉より先端部寄りに設ける場合と、基部寄りに設ける場合の2通りが認められる。そのとき、それぞれの竪穴改築の在り方は、図221に示したKE12・SR25両竪穴の改築方法、および、石囲炉の位置が竪穴の長さの3等分点(先端部寄りの点)に対応する事実を参考に、次のように説明することができる。即ち、1の新炉が旧炉より先端寄りに設けられる場合、竪穴の改築は、KE12・SR25両竪穴でと同様、全体に均等な幅で拡張を行なったものであろう。2の新炉が旧炉より基部寄りに設けられる場合、竪穴の長さの3等分点と炉位置の関係から、竪穴の改築は、主に基部方向に拡張を行なったものとする。スクリーントーン部は、改築(拡張)した範囲を示す。

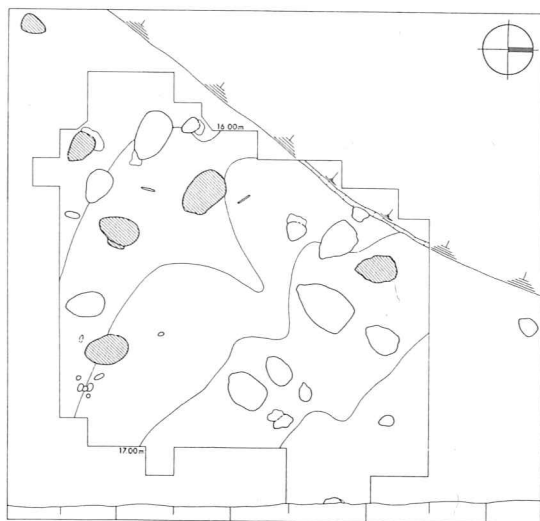


図226 石囲いの遺存する炉の分布 石囲炉の礎が50%以上遺存する竪穴を、スクリーントーンで示した。竪穴群を大きく南北2群に分けた場合、石囲いを残す竪穴の分布は南群に集中する。しかし、炉石が完全に遺存していたのは、焼失竪穴のEL12・SR25の2竪穴のみであるため、南群に最終的な居住が行なわれたか否かを、この資料から述べることはできない。

穴改築の在り方を示した。C B 75, T L 12 堅穴以外の堅穴の石囲炉位置の移動と、そこから推定される堅穴改築の状況は、図225の2つのモデルに収約できる。石囲炉は、改築にともなって若干大形化するか、あるいは旧炉とほぼ同規模に構築されており、旧炉より小形化する例は認められない。

石囲いの遺存する炉の分布 図226に、石囲炉の礫がおよそ50%以上遺存している堅穴の分布を示した。堅穴群を、そのまとまり方から大きく南北2群に分けた場合、石囲いを残す堅穴の分布は、南群に集中する傾向が認められる。ただし南群の5基の堅穴のうち、3基は焼失堅穴と推定されるものである。

6. 堅穴の遺物出土量

図227は、床面・覆土を含めた堅穴の遺物出土量を、100点以下、101～200点、201～300点、301～700点、701点以上の5つの階層に区分し、それぞれの階層ごとの堅穴の分布を示したものである。これによれば、L I 型の堅穴の大半は100点以下、M I — b 型は101～200点、M I — a 型は101～200、200～300点が半々、L A 型は301点以上の出土量を示しており、堅穴が大形のものほど出土量が多いことがわかる。出土量ごとの堅穴の分布を見た場合、斜面寄りに出土量の多い堅穴が位置し、台地奥に入るほど出土量の少ない堅穴が分布している。もちろんこれは、斜面寄りに大形の堅穴が集中することと無関係ではない。堅穴群をそのまとまりから南北の2群に分けて見た場合、各群ごとの出土量に差はほとんどない。結果として、分布する堅穴の大きさに関連するものであろうが、台地奥の堅穴ほど遺物出土量が少ないことを指摘しておく。

III. 堅穴の構造からみた集落の変遷

先に、本遺跡の堅穴群に、形状が互いに異なる2つの堅穴のタイプが存在することを指摘した。即ち、堅穴の基部形状が直線的なものと、丸みをもつものである。このうち基部が直線状をなすものは、堅穴群をその分布上のまとまりから大きく2群に分けた場合、北群に限定的に分布していた。

細分の可能性を否定するわけではないが、現時点では1時期としてくくりに躊躇ない本遺跡出土の短刻線文土器群の様相から、堅穴群がほぼ1時期に形成されたことはまちがいないところだとしても、その形状にこうした2つのタイプが存在することについては、およそ2通りの説明が可能である。

1つには、例えば集団内にいわゆる“双分原理”による2つの対抗集団が存在し、南北2群に分かれて居住を行ない、それに付随して堅穴のタイプが区別されていたことが考えられる。また1つには、土器の様相の上では区分できないものの、両堅穴タイプ間に時間的な差があり、一方のタイプから他方のタイプへと継起していったことが考えられる。

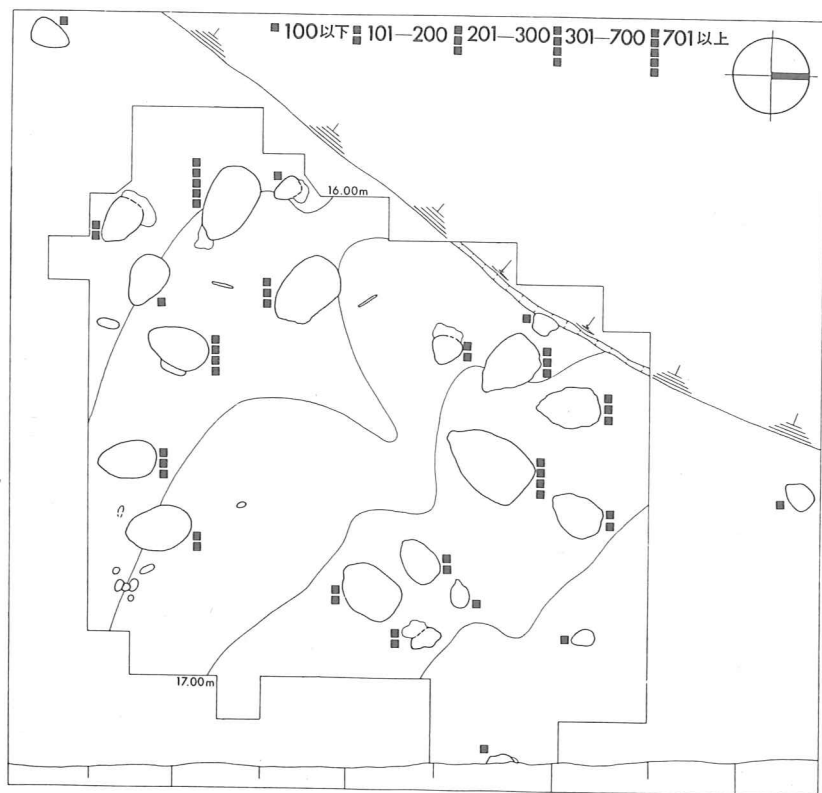


図227 竪穴の遺物出土量 床面・覆土を含めた竪穴の遺物出土量を示した。大形の竪穴ほど出土量が多く、小形の竪穴ほど出土量が少ない。特異な出土量の傾向を示す竪穴は認められない。

前者の、大きく2分割される竪穴群の在り方を、双分原理とそれに基くところの双分制（制度）によって説明する仕方は、水野正好によって提唱されて以来、広く受け入れられるところとなっている。しかし、本遺跡についてみる限り、竪穴群は現象的には2分割が可能であるものの、両群が同時併存し、それぞれに対抗集団の居住区として機能していたという積極的な証左は見出せない。むしろ、以下に述べる道南に分布する短刻線文土器群の時期の竪穴の在り方からすれば、後者の説明がより妥当と考えられる。

現在までに報告された短刻線文土器群の時期の竪穴は、いずれも卵形の平面形をもち、石囲炉および本論で提唱した“先端部ビット”を備えるという均一な構造を示すものである。しかし、これまで注意されなかったことであるが、本遺跡と同様これらの竪穴にも、竪穴基部が直線状をなすものと丸みをもつものの2つのタイプが存在す

る。そのうち、基部が直線状をなす例として、函館市西股遺跡 3・4・9 号住居址、¹⁰⁾ 同西桔梗 E2 遺跡 1・2・3・4・6 号住居址、¹¹⁾ 南茅部町白尻 B 遺跡 8 号住居址、¹²⁾ 同 H P 34・41・42・71 号住居址、¹³⁾ 同 H P 175 号住居址、¹⁴⁾ などがある。このうち、西桔梗 E2 遺跡は、検出された 6 基の竪穴のうち平面形が確認できた 5 基のいずれもが、基部が直線状をなすものであった。遺跡は広域に調査が行なわれており、近接して別に同期の竪穴群が存在する可能性は薄い。この例からすれば、千歳 6 遺跡で確認された竪穴の 2 つのタイプは、同時に平行して存在した竪穴タイプのヴァリエーションとは考えにくい。

このとき、南茅部町白尻 B 遺跡で検出された H P 190 竪穴の様相は示唆的である。H P 190 竪穴は、基部が直線状をなす卵形の平面形を呈するもので、報告者は、先端部で検出された周溝の在り方から、隅丸方形の平面形から卵形の平面形への竪穴の拡張を想定し、時間的にはそれぞれ榎林式、¹⁵⁾ “ノダップ II 式” (短刻線文土器) をあてて、前者から後者への竪穴形状の変化を考えている。短刻線文土器群の時期の卵形の竪穴が、榎林式期の隅丸方形の竪穴から直接出自したとするならば、卵形の平面形をもつ竪穴のうちでも、竪穴基部が直線状をなす一群の竪穴は、やや古い様相を示すものと考えられないであろうか (図 228)。

このように考えた場合、本遺跡においては、基部が直線状をなす北群の竪穴を古く、基部が丸みをもつ南群の竪穴を新しく位置づけることができるであろう (図 229)。さらに、本遺跡における短刻線文土器群期の居住の在り方は、このような推定される竪穴の変遷から、次のように述べることができる。即ち、当初、やや高位の台地北半に竪穴の構築・居住が行なわれる。北半に遺存する竪穴が全て同時に利用されていたか否かは明らかにし得ないが、各竪穴は、推定される改築の事実から、一定期間継続的に居住が行なわれたと考えられる。もちろん、竪穴改築に至るプロセスとして、移動と竪穴の放棄、再帰と竪穴の再利用 (改築) を想定することも可能である。次いで、

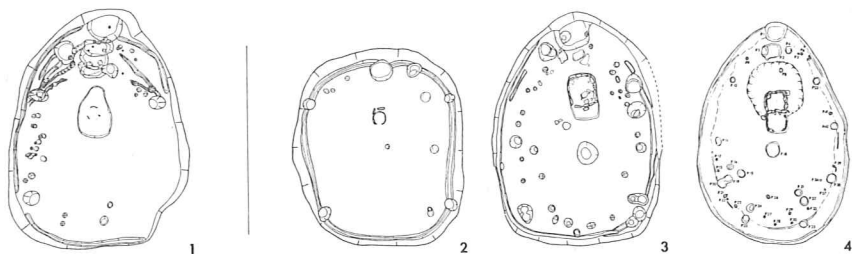


図 228 竪穴形状の変遷 1 は、本文中に述べた南茅部町白尻 B 遺跡 H P 190 竪穴。2・3・4 は、榎林期から短刻線文土器群期にかけての竪穴例である。榎林期の隅丸方形の竪穴(2)から、短刻線文土器群期の基部が直線状をなす竪穴(3)、基部が丸みをもつ竪穴(4)への変遷を示す。縮尺は、1・2・3 が $\frac{1}{150}$ 、4 が $\frac{1}{240}$ 。出典は、1・2 が註 8 文献(1980年度分)の H P 190・150 竪穴、3 が註 8 文献(1979年度分)の H P 34 竪穴、4 が本遺跡の S R 25 竪穴である。

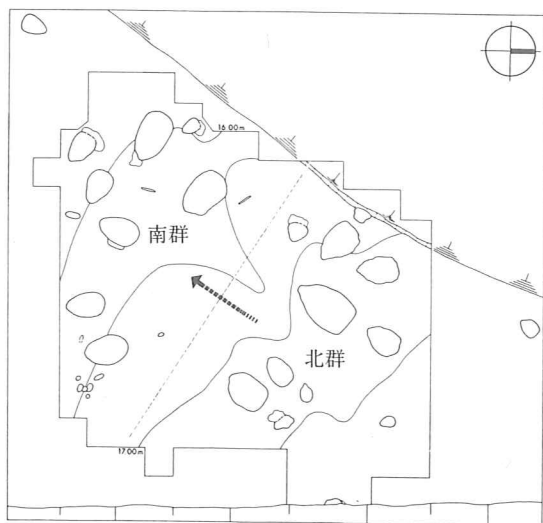


図229 竪穴群の変遷 千歳6遺跡における竪穴群は、北群をやや古く、南群を新しく位置づけることができる。しかし、この竪穴占地の移動は漸移的なものでなく、北群の居住の完結後、やや時間的な断絶をはさんで南群の居住が開始されたと考えられる。破線によって南群と北群の境を、矢印によってその前後関係を示した。

やや低位の台地南半に竪穴群が移動する。この北半から南半への占地の移動は、竪穴平面形の変化という事実から考える限り、漸移的なものとは考えにくい。むしろ、北半の居住の完結と、その後の南半への移動に至るまでの時間的な断絶を示唆するものである。

IV. 要約

本論は、千歳6遺跡で検出した縄文時代中期終末の竪穴群について、その構造を分析・復元するとともに、その変遷について、一方のレベルでは改築による竪穴個々の様相を、また一方のレベルでは遺跡における竪穴群全体の様相を明らかにしようとしたものである。

竪穴の構造については、まず、竪穴の大きさと形態の分析から、大きさに各種があり、そのグルーピングが可能であること、そのグループ個々に対応して竪穴の形状にわずかつつ違いがあることを指摘した。また、焼失竪穴における炭化材出土状況および竪穴床面における固い床の分布状況から、それぞれ上屋構造と竪穴内の利用状況—屋内区画—について、復元を行なった。さらに、特徴的な構造として、竪穴先端部における浅い皿状の掘り込みを指摘し、機能については不明なものの、“先端部ピット”

と呼んで他の掘り込みとの区別を行なった。

竪穴の変遷については、まず、炉構造の分析を通じて竪穴個々の改築の状況について明らかにすることができた。また、遺跡内における竪穴群の変遷については、認められる2つの竪穴タイプの在り方から、道南に分布する短刻線文土器群諸遺跡の分析を行ない、その結果、本遺跡においては台地北半から南半へと竪穴群の移動—居住区の変更—が行なわれたこと、その移動が漸移的でなく、間に一定の時間的な断絶を想定し得ること、そして、これらが全て1つの斉一性をもつ土器の時間枠のなかで行なわれたことを、それぞれ指摘した。なお、竪穴個々の遺物出土量の比較・検討を行なったが、竪穴群の変遷を考える上に有為な傾向を認めることはできなかった。

- 註1) 関野克「埼玉県福岡村縄文前期住居址と竪穴住居の系統について」『人類学雑誌』第53巻第8号、1938年
- 2) 未婚の青年であるとか、「他所者」であるといった可能性も考えられよう。また、季節的に利用を行なった仮小屋かもしれない。
- 3) 都出は、「火災に遭遇した住居の床面において、炭化材の上に厚く堆積した焼土が周壁近くに多い場合には、その焼土を周堤の土と考えることもできるのではないか」(傍点瀬川)と述べている。都出比呂志「竪穴式住居の周堤と壁体」『考古学研究』第22巻第2号67p、1975年
- 4) 加藤も、本遺跡の竪穴群とほぼ同時と思われる函館市西桔梗遺跡の竪穴の覆土の分析から、上屋上に地山掘り上げ土を覆い被せたものと考えている。加藤邦雄「E2遺跡における若干の問題点」『西桔梗』函館圏開発事業団、1974年
- 5) 竪穴平面形が長棟のものは、「寄棟もしくは入母屋造り」で、「叉首構造・桁行で垂木平行配置・妻側で垂木扇配置」の小屋組みが行なわれるという。橋本正「竪穴住居の分類と系譜」『考古学研究』第23巻第3号40p、1976年
- 6) 縄文中期の関東・中部地方を中心に、本遺跡の竪穴における先端部ピット類似の張り出し・掘り込みを設け、そこに埋襲・石棒を安置した竪穴が多く認められるが、これについて、祭壇あるいは祭祀施設とする意見がある。例えば、水野正好「埋襲祭式の復原」『信濃』第30巻第4号、1978年
- 7) 註4文献に同じ
- 8) 道南の中期終末期の竪穴に伴なう石囲炉は、大半が円礫の長軸を連ねて囲いを形成している。しかし、わずかではあるが、短軸を連ねた例も認められる。例えば、函館市西桔梗E2遺跡1・2・4・6号住居址(註4文献)、南茅部町白尻B遺跡H P157号住居址(『白尻B遺跡』南茅部町教委、1980年)、同H P57・74号住居址(『白尻B遺跡発掘調査報告』同教委、1979年)など。
- 9) 水野正好「縄文式文化期における集落構造と宗教構造」『日本考古学協会第29回総会研究発表要旨』、1963年および、同「縄文時代集落復元への基礎的操作」『古代文化』第21巻第3・4号、1969年
- 10) 『西股』北海道第四紀研究会、1974年
- 11) 註4文献に同じ
- 12) 『白尻B遺跡発掘調査概報』南茅部町教委、1978年
- 13) 註8文献の1979年度報告に同じ
- 14) 註8文献の1980年度報告に同じ
- 15) 小笠原忠久「第10節、小括」註8文献、1980年度報告104p